

高等学校男女必修家庭科における学習内容の評価

— 履修後の生徒による評価に基づいて —

長澤 由喜子* ・ 小川 麻紀子**

(1995年12月8日受理)

Yukiko NAGASAWA and Makiko OGAWA

Evaluation of Learning Content of Co-educational Compulsory

Homemaking Education in Senior High School

— Based on the Evaluation by Students After Learning —

高等学校における男女必修家庭科の実施後1年を経て、生徒たちが家庭科の履修内容をいかに受け止めたかを明らかにし、今後の指導上の手掛かりを得るべく、履修10項目の内容への興味の有無による5段階評価に基づく分析を試みた。分析の結果、①男女の比較では全般的に女子の評価が高いものの、履修項目の志向性に関しては男女差は認められないこと、②評価傾向を形成する2つの軸として学習形態の因子と学習領域の因子が捉えられたこと、③評価傾向の志向性は5つにグルーピングされ、中でも講義形式志向群の存在に注目できること、④家庭科の成績評価の高い群は高齢者問題への高い興味を示し、体験的学習を志向する傾向が強いことなどが明らかとなり、進学校としての調査対象校における生徒の家庭科の学習内容に関する志向性の特徴が捉えられた。

〔キーワード〕 高等学校家庭科、男女必修、家庭一般、学習内容、評価、因子分析

1. はじめに

高等学校における家庭科は、男女が協力して家庭生活を築くための実践的な態度育成の教科として、平成6年度より男女必修の運びとなり、「家庭一般」「生活一般」「生活技術」の3科目から1科目4単位選択必修の形で実施されている。「家庭一般」「生活一般」「生活技術」は、内容的に各々特色ある科目として解説書¹⁾には示されているが、3科目の共通性と相違性をいかに理解し把握するかとかかわって、その区別の曖昧性が指摘され、3科目制への疑問が提示されている。²⁾ 3科目の区別が明確でない限り、特別措置³⁾

* 岩手大学教育学部家政教育

** 岩手県立平館高等学校

の対象となる「生活一般」の選択は望ましくないと判断でき、岩手県教育委員会の方針として、県立学校においては「家庭一般」の選択履修の徹底を図った結果、県立学校における「家庭一般」の選択率は約8割に達している。しかし、実態として「家庭一般」4単位が内容的に満たされているのか、あるいは2年目以降の実施の運びが1年目の方針を貫く形で実施されているのか、さらには実施後1年を経て、男女必修は生徒たちには違和感なく受け入れられたものの、高等学校の他教科の教師たちや生徒の父母たちの戸惑いを払拭するに至ったのかなど、今後高等学校における家庭科必修の意義をより明らかにし、より生徒の意欲を喚起するための指導のあり方が改めて問い直されており、男女必修家庭科に関しては、解決すべき多くの課題が残されている。

本報告は、男女必修実施後1年を経て、1年間の家庭科の学習内容を生徒がどのように受け止め、評価しているかを明らかにする中で、男女必修家庭科の指導に関する考察を試みるものである。家庭科の男女必修がもたらす影響は、普通科と職業科の場合を分けて考察する必要があるが、とりわけ家庭科の男女必修を苦々しく迎えた進学校にとって、受験外教科としての家庭科の必修枠の確保は、受験教科の指導強化とかかわって深刻な問題となっている。本報告は、男女必修実施に関わる問題の一つとして、進学校における男女必修に着目し、選択履修が望ましいとされる「家庭一般」における学習の取り組みが、生徒にとって魅力的であるための授業構想の手掛かりを得るべく、1年間履修後の生徒による学習内容評価の分析を試みるものである。

2. 調査方法

調査対象校は「家庭一般」選択で1年次2単位、2年次2単位の履修形態をとる。対象校における平成6年度「家庭一般」の学習内容の概要を表1に示す。2年次には食生活領域および保育領域を中心とする履修が組まれているが、2年次の学習内容に関しては、1年次の学習内容に比較して学習意欲や教材研究などの点で問題が少ない。⁴⁾すなわち、中学校課程の食物領域は男女必修であり、調理実習における生徒の学習意欲は突出し、さらに保育領域は高等学校家庭科独自の内容として中学校課程との連携から男女共修の可能性が高く、生活の中の矛盾を教材化しやすい。⁵⁾

表1 男女必修家庭科「家庭一般」学習内容
(岩手県立M高等学校平成6年度の場合)

学習項目	学習内容
(1) 家族の機能と家庭生活	家族形態、家族機能の変化、変容する家族と家族問題 ドラマのシナリオ作り 労働時間と余暇時間、職業労働と家事労働 高齢化社会の課題、日本の福祉の現状、豊かな老後とは？ 施設見学：住宅展示場、老人保健施設 家計の特徴、消費と環境、資源問題、消費者問題、 消費者の権利と役割
(2) 家族問題を考える	
(3) 家族の生活と家庭経営	
(4) 高齢化社会の現状	
(5) 高齢者と住宅問題	
(6) 家庭経済と消費	
(7) 消費者問題への対応	県民生活センターの見学
(8) 被服製作	エプロン作りほか
(9) 被服の成り立ち	被服の起源、被服の機能
(10) 被服材料と被服管理	繊維の特徴、燃焼実験、洗濯の原理と洗剤

一方、1年次に位置づく学習内容の場合、選択必修3科目に共通する内容の中で家族・消費生活・高齢者問題に関する学習は、高等学校家庭科の特色である家庭経営の中核を成し、時代の要請に応えるものでありながら、授業における生徒の意欲喚起が困難な内容である。また中学校課程において選択領域となった被服領域は、製作経験や技能における個人差、施設・設備の不備など、指導に困難をきたす要因が多い。したがって、表1に示す1年次の学習内容は、生徒の意欲喚起の点で共通の問題点を含むと考えられ、2年次の学習への取り組み姿勢を決定づける意味においても、高等学校男女必修にかかわる指導上の問題点を捉えるに足る内容構成であると判断できる。

調査対象は岩手県立M高等学校1年生318名(男子195名,女子123名)であり、平成6年度の学習内容10項目に関する評価を中心とし、自記式質問紙による調査を実施した。調査時期は平成7年3月である。

評価方法は、学習に対する興味の程度に関する5段階尺度を採用し、同時に、興味を持ち得た学習内容の順番、興味を持ち得なかった学習内容の順番に各3項目を選択させた。さらに、家庭科の学習に対する1年間の感想を「好き」の5段階尺度で回答させる項目を加え、その理由を自由に記述させることとした。

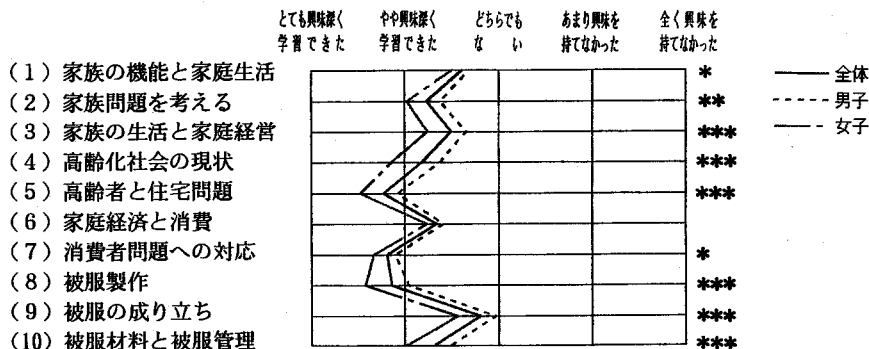
結果の処理については、各項目ごとに肯定を高得点とし、5点～1点の点数化を行った。データの処理分析には岩手大学情報処理センターTSSによるSASを利用した。

3. 結果および考察

(1) 学習項目評価の全体的傾向

1) 評定平均プロフィール

学習項目の評定平均プロフィールを図1に示す。履修10項目の中で最も評価の高い項目は「高齢者と住宅問題」であり、次いで「消費者問題への対応」「被服製作：エプロン作り」と続く。いずれも施設見学や製作活動による体験的学習形態を組み入れている点で共通する。一方、評価の低さは「被服の成り立ち」で際だっており、次いで「家族の機能と家庭生活」が続き、講義形式の学習形態をとる学習項目として、評価の高い項目群と対比をなしている。



註) 男女差 t 検定 p<0.05* p<0.01** p<0.001***

図1 学習項目評定平均

男女間の比較では、図1に明らかなように「家庭経済と消費」を除く全ての項目において女子の評価が有意に高く、消費者教育的な内容に関して男女間に有意差が認められない事実に注目できる。評価の高さに関しては、男女で高さの順序に多少の入れ替わりが認められるが有意な違いではない。一方、評価の低い項目は一致している。したがって、評価の高さに関しては男女差が明らかであるが、項目による評価傾向に関しては男女による有意な差は認められない。

2) 因子の抽出

表2 学習内容因子負荷量

因子	評定項目	因子負荷量				共通性	因子の解釈
		I	II	III	IV		
I	(3) 家族の生活と家庭経営	0.846	0.095	0.053	0.098	0.736	講義形式による 学習内容
	(1) 家族の機能と家庭生活	0.810	0.171	0.088	0.004	0.693	
	(4) 高齢化社会の現状	0.715	-0.065	0.407	0.204	0.723	
	(6) 家庭経済と消費	0.475	0.161	0.522	-0.387	0.674	
II	(10) 被服材料と被服管理	0.094	0.824	0.135	-0.037	0.708	被服関連学習内容
	(9) 被服の成り立ち	0.349	0.807	-0.016	0.033	0.774	
	(8) 被服製作：エプロン作り	-0.112	0.679	0.186	0.236	0.564	
III	(7) 消費者問題への対応	0.091	0.321	0.735	-0.028	0.652	体験的学習を組み 入れた学習内容
	(5) 高齢者と住宅問題	0.199	-0.056	0.713	0.449	0.752	
	(6) 家庭経済と消費	0.475	0.161	0.522	-0.387	0.674	
	(4) 高齢化社会の現状	0.715	-0.065	0.407	0.204	0.723	
IV	(2) 家族問題を考える：シナリオ作り	0.148	0.182	0.084	0.835	0.760	家族関連学習内容
	(5) 高齢者と住宅問題	0.199	-0.056	0.713	0.449	0.752	
寄与率 (%)		因子別	33.0	28.4	22.1	16.5	
		累積	33.0	61.4	83.5	100.0	

各調査対象における評価値を変量とし、主因子法による因子分析を行い、固有値 1.0で規準化バリマックス回転の結果、4因子が抽出された。バリマックス回転後の因子負荷量 0.4以上の学習項目を各因子ごとに分類した因子行列を表2に示す。各因子の解釈を試みた結果、第I因子は「講義形式による学習内容」、第II因子は「被服関連学習内容」、第III因子は「体験的学習を組み入れた学習内容」、第IV因子は「家族関連学習内容」と考えられる。すなわち、第I因子と第III因子は学習形態の因子、第II因子と第IV因子は学習領域の因子として分類でき、評価傾向を形成する2つの軸を捉えることができた。

(2) 学習内容評価の志向性

1) 志向性グループの抽出

各調査対象における4因子の因子得点を類似度とし、WARD法によるクラスター分析を試みた結果、全体をA～Eの5群にグルーピングすることができた。

グループ別平均因子得点をレーダーグラフとして表わした結果を図2、グループ別人数と男女構成を表3に示す。図2より、A～Dグループは第I～IV因子がそれぞれ突出した特徴を示すことから、Aグループは「家族学習志向群」、Bグループは「講義形式志向群」、Cグループは「被服学習志向群」、Dグループは「体験的学習志向群」として捉えられる。同様にEグループは、第IV因子がやや落ち込むものの全体的に高得点であることから「高バランス型志向群」として解釈した。

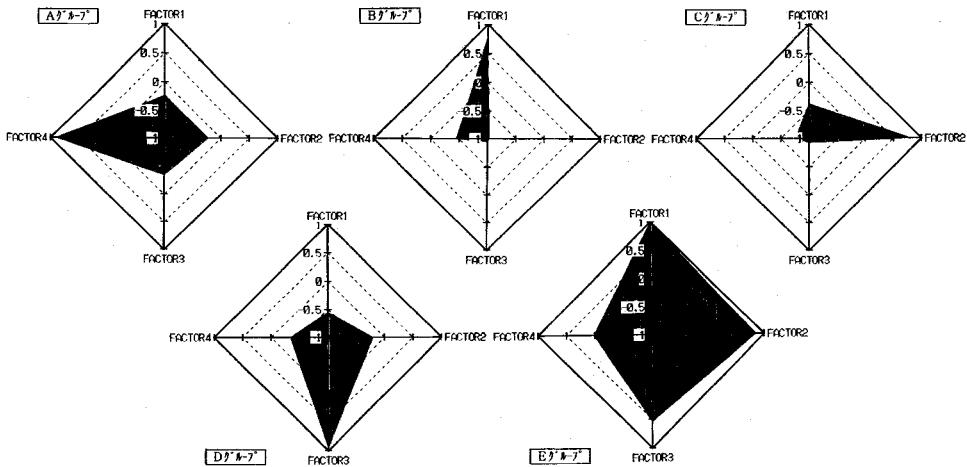


図2 グループ別平均因子得点レーダー

表3 グループ別男女構成

	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	Eグループ	計
男子	47(25.5)	33(17.9)	27(14.7)	54(29.4)	23(12.5)	184(100)
女子	40(33.3)	7(5.9)	16(13.3)	33(27.5)	24(20.0)	120(100)
計	87(28.6)	40(13.2)	43(14.1)	87(28.6)	47(15.5)	304(100)

註1) () 内%値

註2) 因子分析有効サンプル数304名

表3をみると、男女構成のアンバランスがBグループにおいて際だち、男子生徒において講義形式を志向する一群の存在を確認できる。またAグループおよびEグループにおいて女子の割合が高い傾向が認められるが、Bグループを除くいずれのグループにも、多少の男女差はありながら男子生徒が同程度含まれる事実に注目できる。

さらに、グループ別に履修10項目の平均評定を算出し、レーダーグラフとして表した結果を図3に示す。図3は当然図2の傾向を反映するが、ここでは図2に表れた傾向以外の特徴を探ることとする。図3より、Aグループの「家族学習志向群」は、家族問題に関するシナリオ創作と高齢者住宅の評価が高く、同時に被服製作の評価が高いことから、興味・関心の方向は家族問題にあるが、学習形態としては体験的な部分を含むものを好む傾向が新たに捉えられる。Bグループの「講義形式志向群」は、全体的に評価が低い中で、被服製作の落ち込みが著しく、家族の機能と家庭生活、家族の生活と家庭経営、高齢化社会の現状の評価がEグループに次いで高い特徴を示し、体験的な学習を好まない傾向が明らかである。Cグループの「被服学習志向群」もBグループと同様に全体的に評価は低いが、被服関連項目がいずれも高く、中でも製作や実験を含む項目が突出している。消費者問題への対応が他項目に比較して高い傾向は、体験的な学習形態および被服関連の消費者教育的側面への志向性を示すと考えられる。Dグループの「体験的学習志向群」は、体験的な学習形態を志向する中で、家族学習における疑似体験としてのシナリオ創作への興味・

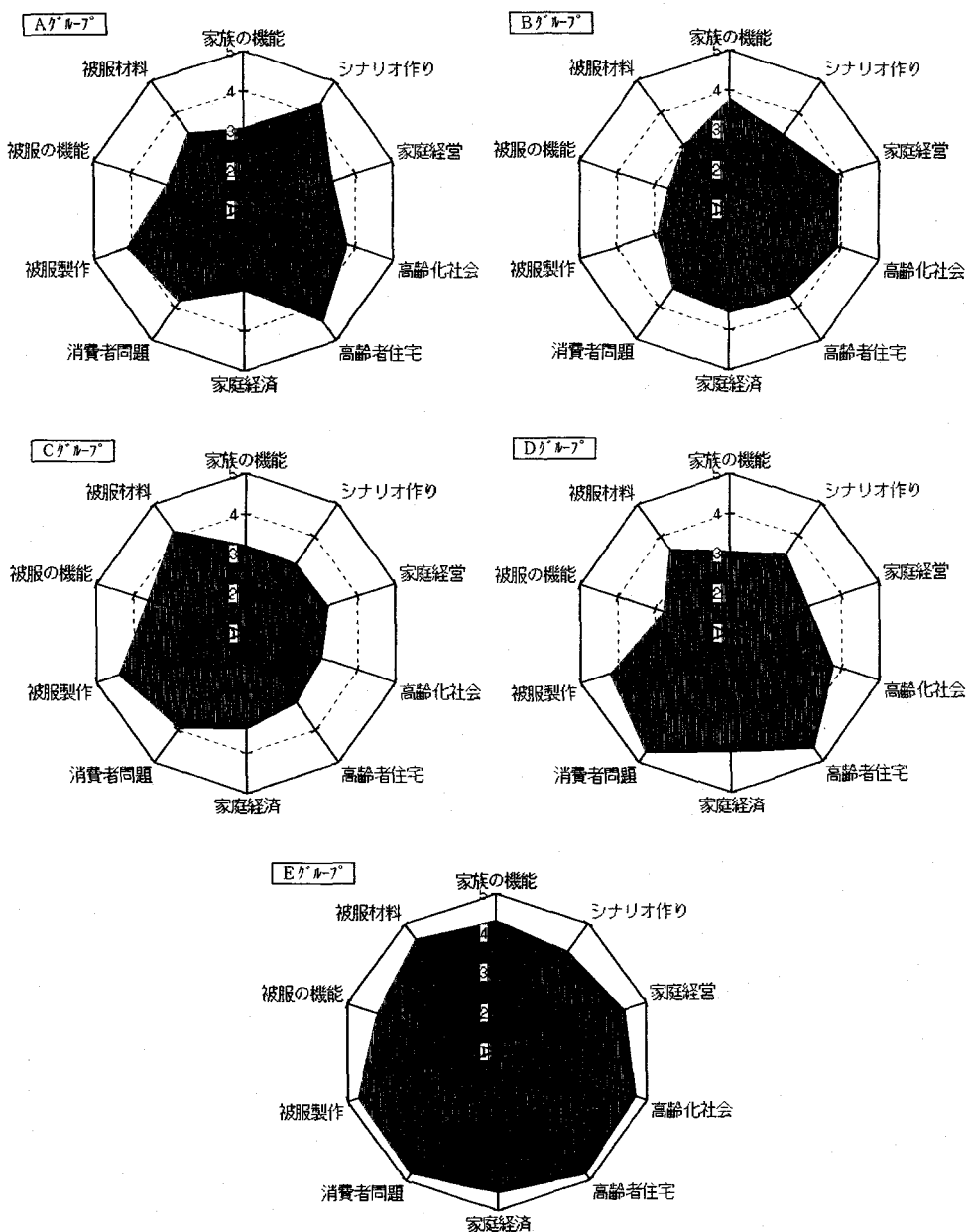


図3 グループ別学習内容評定平均レーダー

関心の高まりは僅かであり、あくまでも身体的・实际的活動を通した学習を志向する傾向が捉えられる。さらにEグループの「高バランス志向型群」は、いずれの項目も均一に高く、因子得点レーダーによる第IV因子の落ち込みは評定平均には表れていない。

2) 家庭科の成績評価との関連

家庭科の年度末評価の点数を上位2群 (HH群とH群) と下位2群 (L群とLL群) の

表4 家庭科成績グループ別男女構成

	HH群	H群	L群	LL群	計
男子	40(20.5)	36(18.5)	55(28.2)	64(32.8)	195(100)
女子	49(39.8)	38(30.9)	22(17.9)	14(11.4)	123(100)
計	89(28.0)	74(23.3)	77(24.2)	78(24.5)	318(100)

註1) () 内%値
 註2) χ^2 検定 $p=0.000$

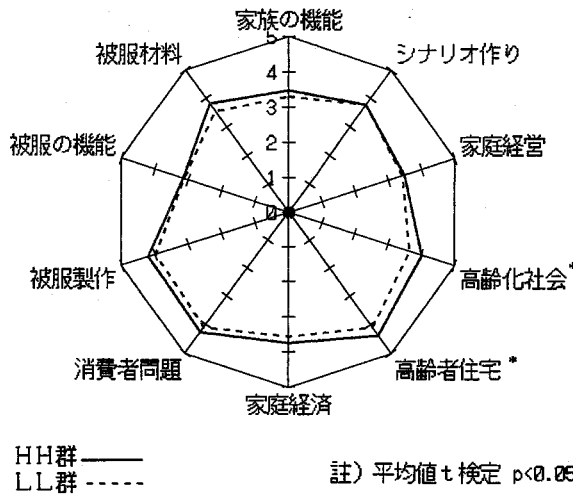


図4 家庭科の成績による評価平均比較

計4群にグルーピングすることにより、志向性グループとの関連を検討した。成績群の男女別構成を表4によりみると、全体的に上位群に女子が占める割合が高く、履修項目評価の全体的傾向における男女差を反映している。さらに成績群による履修10項目の評価の差の検定を行った結果、HH群とLL群間の一部項目に有意差が認められた。その結果を図4に示す。図4より、有意差が認められたのは講義形式の「高齢化社会の現状」と住宅見学を含む「高齢者と住宅問題」の2項目であった。この差は、図1における男女差の影響を一部含むと考えられるが、HH群は人数では男子が女子と同程度含まれることから、男女差のみの影響ではなく、志向性の影響をも含むと考えられる。したがって、成績評価の高い群の場合、学習形態と関係なく、高齢者問題に対して高い興味・関心を示す事実として捉えられる。具体的には、老人保健施設において実施したボランティア活動による総合的な学習効果が大きいと推察される。

さらに成績群と志向性グループとの関連を検討した結果、有意な偏りは認められないが、男子では上位群の約4割をDグループが占め、下位群では約3割がAグループであり、さらにEグループの約半数がLL群である特徴が認められる。一方、女子の場合にも上位群でDグループへの偏りを示している。したがって、男女ともに上位群ではDグループへの偏りを示し、下位群に比較し、上位群の方がより体験的学習を志向する傾向が捉えられた。また、特に男子のLL群にEグループが多い事実は、進学校において成績が優れない一群

が、受験教科外の家庭科に学習意欲を示す事実として興味深い。さらに、L L群では、最も興味を持てた履修項目として「シナリオ創作」の選択割合が最も高く、最も興味を持てなかった履修項目として「高齢化社会の現状」の選択割合が最も高いことから、同じ社会的問題を題材としながら、自由度が高く新たな学習形態の学習内容には興味を示す事実にも注目できる。

3) 家庭科の学習に対する好感度との関連

家庭科の学習に対する好感度との関連をグループ別に検討した結果を表5に示す。「大変好きである」「やや好きである」を合わせ約7割の生徒が肯定的な回答をし、中間的あるいは否定的な回答は3割と全体的に肯定的な受け止め方をしている。

表5 家庭科学習に対する好感度（グループ別）

	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	Eグループ	計
大変好きである	10(18.9) (11.5)	3(5.7) (7.5)	5(9.4) (11.6)	13(24.5) (14.9)	22(41.5) (46.8)	53(100.0) (17.5)
やや好きである	46(28.2) (52.9)	18(11.1) (45.0)	25(15.3) (58.2)	51(31.3) (58.6)	23(14.1) (48.9)	163(100.0) (53.6)
どちらでもない あまり好きではない 全く好きになれない	31(35.2) (35.6)	19(21.6) (47.5)	13(14.8) (30.2)	23(26.1) (26.5)	2(2.3) (4.3)	88(100.0) (28.9)
計	87(28.6) (100.0)	40(13.2) (100.0)	43(14.1) (100.0)	87(28.6) (100.0)	47(15.5) (100.0)	304(100.0) (100.0)

註1) () 内上段：ヨコ%値，下段：タテ%値

註2) χ^2 検定 $p=0.000$

註3) 因子分析有効サンプル数304名

グループ別にみると「大変好きである」の割合はEグループが圧倒的に高く、逆にBグループでは約半数が肯定的な回答をしていない。次いで否定的な回答を示すのはAグループである。Bグループは、講義形式志向群として体験的な学習を好まず、解説書の「特定の内容について、いわゆる座学を中心とした細部にわたる事柄や程度の高い理論を深く追求するのではなく……」⁶⁾の記述において避けるべきとされることを逆に求めるタイプであることから、当然否定的な回答の割合が高くなっている。このタイプが特に進学校において独自に認められるのか、あるいは他校との割合比較など、さらに検討を重ねる必要がある。

家庭科の「好き嫌い」の理由に関する自由記述の分析結果は稿を改めて報告したい。

4. 要約

県内有数の進学校である岩手県立M高等学校における男女必修家庭科の実施後1年を経て、生徒たちが家庭科の履修内容をどのように受け止めているかを明らかにし、今後の指導上の手掛かりを得るべく、履修10項目の内容への興味の有無による5段階評価に基づく分析を試みた。

得られた結果は以下に要約される。

(1) 履修10項目で評価の高い「高齢者と住宅問題」「消費者問題への対応」「被服製作：エプロン作り」は、いずれも施設見学や製作活動による体験的学習形態を組み入れた学習項目であり、一方評価の低い「被服の成り立ち」「家族の機能と家庭生活」は講義形式の学習形態をとる学習項目として、評価の高い項目群と対比をなす。

(2) 男女間の評価比較では「家庭経済と消費」を除く全ての項目において女子の評価が有意に高いが、項目による評価傾向に関しては男女間の有意差は認められなかった。

(3) 履修項目評価の因子分析の結果、4因子が抽出され、評価傾向を形成する2つの軸として、学習形態の因子と学習領域の因子が捉えられた。

(4) 学習項目評価の志向性グループとして、A「家族学習志向群」、B「講義形式志向群」、C「被服学習志向群」、D「体験的学習志向群」、E「高バランス志向型群」の5群に分類できた。

(5) 家庭科の成績評価が最も高い群では、学習形態と関係なく高齢者問題に対して高い興味・関心を示す傾向が認められた。

(6) 男女ともに家庭科の成績上位群では、Dグループへの偏りを示し、上位群における体験的学習への志向性の高さが示唆された。

(7) 家庭科が「大変好きである」割合はEグループが顕著に高く、逆にBグループでは約半数が肯定的な回答を示さなかった。

以上、男女必修家庭科の履修後の評価では、男子に比較して女子が興味・関心、成績評価ともに高い傾向を示し、男子生徒の学習意欲をいかに喚起するかに関し、今後さらに検討の余地がある。しかし、学習項目の志向性においては男女差が認められず、教師がとりわけ男女の差を意識する必要のないことが明らかとなった。調査対象が、現実社会における問題として高齢者問題に高い関心を示す姿勢は、進学校独自の特徴として捉えられるであろうし、体験的な学習を志向する傾向は、日常的に役立つことを実感できない学習に埋没している進学校の生徒にとって、家庭科の学習がより新鮮に映るであろうことを示している。これが単なる「息抜き」の教科とならないためには、卑近な役立ち主義⁷⁾を排した体験的な学習の積み重ねの中に、確実に生き方の選択にかかわる生活技術を位置づける指導の工夫が不可欠である。

高等学校男女必修家庭科の問題に関しては、今後さらに職業科や郡部高等学校における男女必修の問題なども含め、具体的に各校の特殊性を明らかにする中で、問題点の洗い出しを行う必要がある。本報告の分析結果は、男女必修が緒についた段階における生徒による評価に基づく知見として、今後の指導を構想する際の資料として位置づく。さらにこれら知見に基づいて検討課題を焦点化することにより、実践的な検討を重ねたいと考える。

参考文献

- 1) 文部省『高等学校学習指導要領解説：家庭編』（実教出版、1989）pp.5～10
- 2) 村田泰彦著『主体と共生の教育論—男女の新しい関係づくりのために』（労働教育センター、1993）pp.228～230
- 3) 前掲書1), p.6

「生活一般を履修する場合には、後半の2単位については、施設・設備の整備や担当教員の

確保等の問題など学校の実態からみて止むを得ない場合には、当分の間、生活一般と関係の深い技術や情報などに関する内容の科目又は体育の履修をもって代替できるものとする」として具体的履修にかかわって特別措置が認められている。

- 4) 武藤八恵子著『食生活領域の家庭科教育指導内容』, 家庭科教育, 63巻, 9号(家政教育社, 1989) pp. 139~148
- 5) 田中恒子著『住生活領域の家庭科教育指導内容』, 家庭科教育, 63巻, 9号(家政教育社, 1989) p. 162
- 6) 前掲書1), p. 38
- 7) 前掲書2), pp. 214~215